

心がいない自分と生きる

シスター 渡辺 和子

NHKラジオ
明日へのことば
2012年10月13日



渡辺 和子(わたなべ かずこ、1927年2月 -)は学校法人ノートルダム清心学園の理事長。北海道旭川市生まれ。二・二六事件で青年将校に襲撃された渡辺錠太郎教育総監の次女。9歳の時に二・二六事件でわずか1mのところで父親が銃弾に倒れるのを目のあたりにし、大変な衝撃を受ける。18歳でキリスト教の洗礼を受け、29歳でノートルダム修道女会に入会。アメリカへ留学し、ポストンカレッジ大学院で博士号を取得したのち、36歳という異例の若さで岡山県のノートルダム清心女子大学の学長に就任。長年にわたり教壇に立ち、学生の心を支え指導する。1957年にはうつ病を患う。1984年にマザー・テレサが来日した際には通訳を務めるなど多方面で活躍。著書も多数。1990年にはノートルダム清心女子大学の名誉学長、及びノートルダム清心学園の理事長に就任。1992年には日本カトリック学校連合会理事長に就任した。

渡辺和子、85歳。18歳で母の反対をおしきり洗礼を受け、29歳でシスターになり、1936年、36歳で学長になる。

マザーテレサが来日時、通訳をつとめる。50歳でうつ病になる。

4、50年前より日々、若い人に囲まれ幸せ。今の若者は昔とくらべると打たれ弱い。昔の人は我慢強かった。

今の若者は、「私が、私が・・・」が強い。めだちたい。めだちたいなら、服装とか化粧、持ち物ではなく、美しい言葉・美しい作法・・・でめだったら！と言っている。

自分は父が53歳の時の子供。父は自分をかわいがってくれた。この子とは長く一緒にいられないから・・・とよく言っていた。膝の上のにのせてくれ論語を教えてもらった。

22歳年上の姉がいて、母が私を産んだ頃、姉が子供を生み、渡辺家は子供・孫が同時に生まれた。

2・26事件で父は自宅で殺された。9歳の自分は父の死を一部始終を見ていた。

母はしつけの厳しい人だった。お行儀、足を揃えてすわる。我慢すること・・・をしつけられた。口答えを許さない人だった。

渡辺家は浄土真宗だったが、キリスト教の洗礼を受け、母とは陰悪な状態になった。キリスト教では、「祈り」「喜び」「感謝」が大切。

29歳で修道院に入った。あるとき、「くれない族」になった。挨拶をしたのに、かえして くれない・・・感謝してくれない・・・と不満が出た時があった。「・・・くれない」の言葉を多発するのが「くれない族」

そんな時、一つのアドバイスを受けた。「あなたが変わらなければ！」と言われ目からうるこだった。それ以来、自分の視点を変えた。自分から生徒に挨拶をした。自分から「有難う！」と言うようにした。学校が明るくなった。

ベルギー人の神父さんが言われた言葉「置かれた所で咲きなさい・・・」を大切にしている。

小さいことで腹を立ててはいけない！

宮本武蔵は「我以外 皆 師なり」と言っている。

生きる力、「よく生きる力」には自己管理が大切。してはいけないことは抑えなければいけない。服装や化粧などの綺麗(外観)はお金で買えるが、美しさ(内部)はお金では買えない。心(内部)を磨くことが美しさに繋がる。

マザーテレサと時の第一印象は、厳しい眼差しの人・・・話してみると温和。

彼女の一番の印象は「祈りの人」自分は小さいことに、精一杯取り組んでいる・・・が口癖。絶えず、神とのコミュニケーションをしていた。

50歳で鬱病になった。病になったおかげで色々なことがわかった。穴があいていることにより見えることがある。

老いたが故に判ることがある。

木を切るのに一生懸命で(量)、斧に目を向ける閑がなかった(質)・・・の言葉がある。斧をもう少し、いたわってやらなかったのか？いかに丁寧にあつかうか？

老いの恵みは「質」を考えるようになったことです。

「今日は、自分の一番若い日。これ以上ない若い日。笑顔で生きる・・・」と言い聞かせている。